

算命学中庸

【初年】 6 回目

6 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【気について】

・【初年】 6 回目【気について】 01

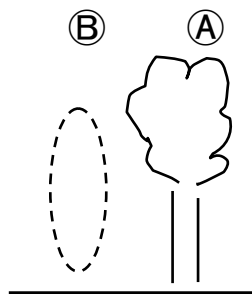
⇒ 算命学には「^き気」という考え方があります。
算命学は「気」の勉強だと思ってよろしいのです。

過去に、一時期「気」という言い方が^{はや}流行ったようです。

〔たとえば〕〔気で幸せになる〕〔気で健康になる〕〔気で財産を増やす〕とか、そのようなことを言っている人もいたそうですが……ほとんどの場合において、本来の「気」という言葉の意味を取り違えて理解している人が多いようです。

⇒ 本来「^き気」というのは、「^さなんのことを指すのか」について
知っておいていただきたいのです。

宿命（１）気



〔たとえば〕

ここに 1 本の樹木が生えているとします。

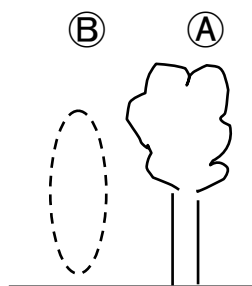
ここには何年たっても
樹木が生えてこない

①の土地には、いつも樹木が生えているけど、

②の場所には、何十年経っても、何百年経っても
樹木が生えてこない。

📌 自然界には、実際このような事象があります。

宿命（２）気



ここにはいつも
樹木が生えてくる
ここには何年たっても
樹木が生えてこない

①の場所と、②の場所を比較して見たときに、

土のなかの養分とか、水分の条件はまったく

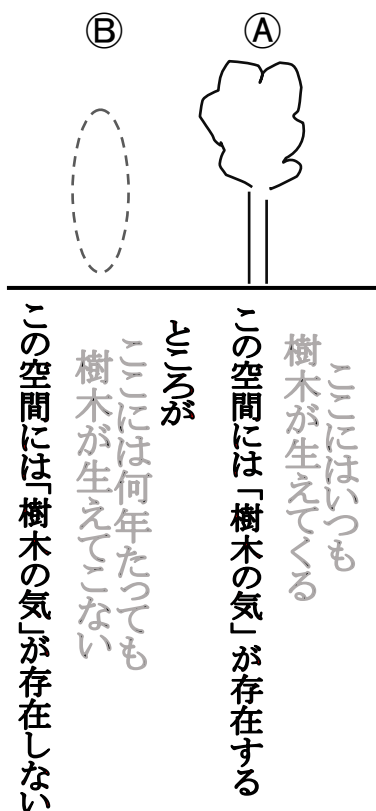
おなじで、おなじようにお日様が当たります。

そして、おなじように雨が降って、なおかつ、

この^{あた}辺り一帯に、毎年毎年、おなじ樹木の種が
蒔かれています。

①の場所はいつも生えて来るけど、②の場所はいつまで経っても樹木が生えて来ないということが起こります。おなじ土壌、おなじ気候条件で、春になるとおなじ樹木の種子^{たね}をおなじように蒔いていても、①の場所には生えて来ても、②の場所には生えて来ないとすれば——その状況を科学的に証明しようとしてもできないでしょう。偶然にそうなったのでは……としかいいようがないはずです。この事象を昔の中国では、この場所には「気」が作用しているのではないだろうか……と考えたのです。

①の場所に樹木が生えてくるのはどうしてなのか……？



宿命（3）気

①の空間には「樹木の気」が存在する。

この空間には、樹木を生み出すチカラの元となる「気」がある。それゆえ、ここには樹木が生えて来るのではないか……。

ところが、②の空間には樹木の「気」が存在しない。だから何年経っても、②の空間には樹木が生えて来ないのではないか……という考え方をしたのです。

つまり、日当たりの条件も、土の水分も、養分の条件も、
ほぼおなじなのに、①の場所に樹木が生えてくるけど、
②の場所に生えて来ないとしたら、日当たりとか、土の
養分とかの条件とは違う——目に見えない別なチカラが
加わったゆえに、①の場所には樹木が生えてきた……。
それが何かわからないけれども……自然界のなかに存在
している眼に見えないチカラを「気」と名づけたのです。

その「気」を言葉で表現すると：

気 ⇒ 自然界に存在する眼に見えないチカラ

を指す言葉です。本来はこういう意味をもっています。

〔たとえば〕普通の実生活でも……お天気がよくて青空
が広がっているのを見て、今日は晴れて「天気がいい」
とか、曇り空で雨がぱらつきそうなら「天気が悪い」と
いう言い方になったわけです。

人間を見たときに「気力のある人だ」とか「気力がない
人だ」とか、そのような言い方になり、それが発展して、

「気が強い人だ」とか「気が弱い人だ」とか、そういう
ふうな表現になっていったのです。しかし、もともとは

精神の強さ「気力」をいっているのではなくて、本来は自然界に存在している眼に見えないチカラを意味しているわけです。

ほそく
補足しますと……。

「気」とは『自然界を構成する元になるちから』をいいます。

この場所に樹木が生えてくる以前に、樹木を生み出そうとする自然界のチカラが働いたので、実際にそこに樹木が生えてきた。そのように考えたわけです。

「気」とは何かという概念を基にして、自然界を分析・研究していきましたところ、自然界には、五種類の気があるようだ。という考えに至ったのです。

自然界には五種類の気が存在する

これが「五行」のことです。

自然界には、「木の気」「火の気」「土の気」「金の気」「水の気」という五種の異なる気が存在している。という結論に達したのです。

それらの「気」が存在するがゆえに、樹木も存在できた

し、火も存在できたし、土も存在して、金も存在して、水も存在できた。という考え方が「五行説」です。

自然界に存在する「気」を眼で見ることにはできないけど、五種類の気は自然界のチカラの源泉であり、それが五行（木火土金水）として具現したのではないか。という考え方をしたのです。

参考・概念 [……とは何か、ということについての考え方]

参考・具現 [はっきりと具体的に現れること。また、実際に現すこと]

五行〔木火土金水〕は、木性・火性・土性・金性・水性
という言い方をしていますけど、それを生み出す以前に

木気（もっき）木性を生み出すもとになるチカラ

火気（かき）火性を生み出すもとになるチカラ

土気（どき）土性を生み出すもとになるチカラ

金気（きんき）金性を生み出すもとになるチカラ

水気（すいき）水性を生み出すもとになるチカラ

という、五つの気が自然界に存在している。

この「気」のことを指すのが、五行〔木火土金水〕です。

五種類の気が存在していたから、自然界に5つの性質の

ものが実際に生まれたのではないか、このような考え方をしているわけです。

⇒ [たとえば] 夏がやって来ると、自然界全体が暑くなります。その暑くなったというのは結果ですが、自然界が暑くなるのは、火性の気のチカラ（火気）が強くなったためではないかと考えたわけです。

⇒ 春になると、自然界は急速に緑に^{おお}覆われます。急に緑の勢いが活発になるという結果の裏側には——、春になると、自然界に木性の気のチカラが強くなるから、そういう現象につながると考えたのです。

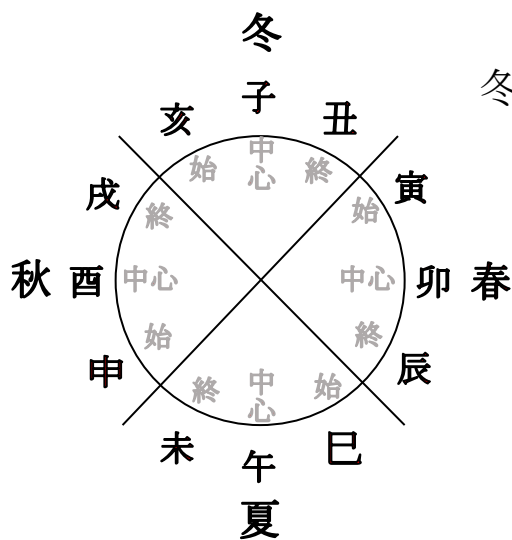
春の十二支は（寅 卯 辰）です。

その春の十二支をいくつも持っている人物を、自然界の事象に^あ当て^は嵌めると——春になると急速に緑におおわれるようになるのだから、春の十二支はもつ人は、それとおなじような運勢をもっていると、考えることもできるのではないか。ということで、占いに^{つな}繋がって行くわけです。

☞ 冬になると寒くなります。

「冬に寒くなるのは、自然界のなかに存在する水の気のチカラ（水気）チカラが強いからである」と、いうふうに考えたわけです。（亥 子 丑）は冬の十二支です。

それは十二支盤で冬の領域にあるからです。



冬の十二支は（亥子丑）の3つです

宿命（4）十二支盤

〔たとえば〕 ㊦ という人が、宿命に夏の十二支（午）をもっているとすれば、その季節に相応した運気の影響を受けます。

下記の宿命は、^{うまづき}午月（真夏）の「^{しんきん}辛金（宝石）」です。

宝石

辛 ○ ○

宿命（5）午月の辛金 うまづきのしんきん

○ 午 ○

（午）夏至で夏の季節をあらわします。

この人は、夏の鋭い陽射しを浴びている宝石といえます。

宝石は光り輝いてこそ価値があります。日光に照らされてひび割れてしまえば価値はなくなります。

光り輝く姿にもどさなくてはいけません。

光り輝けば運勢は好転します。

“それにはなにが必要なのか” というふうに考えていくのです。水が必要です。水があれば運勢が好転します。というように、占いにつながっていきます。

☞ 授業では、^{いちいち}、いままでご説明した「なになに気」という言い方をしない場合がほとんどです。

しかし、実際には、裏側に「気」という考え方が存在している。というふうに思っておいてください。

〔たとえば〕 前代の科学でも、現代の物理学でも、物質は元を正せば、眼に見えない素粒子で出来ている。

そのように考えていますが、その代表的なものは――、

陽子

電子

中性子

このように科学では考えられるわけです。

私たちの身体を形成している肉体も、元を正せば陽子と電子と中性子が集まったもので出来ています。

ところが——陽子と電子と中性子が集まって、人間になるときもあれば、あるときは、教室のホワイト・ボード（もとを正せば、陽子と電子と中性子がいっぱい集まったもの）になるときもあるでしょうし、あるときは樹木になることもあるわけです。

おなじ物質でありながら、無数に集まると人間になったり樹木になったりするのには、何故かというのは、現代の科学でも説明がつかないと思います。おなじ物質からできているのに、ときには樹木、ときには人間になることもあるわけです。そこには眼には見えない、不可思議な存在があると想われます。

算命学では「気」という考え方が大切になってきます。

「気」にはこのような考え方があるのだ……というふう
に思っておいて頂ければよろしいのです。

【初年】 6 回目【気について】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 7 回目【十干の成立】